

一八八七年五月九日(月)

〔ナレンドラの強烈な離欲——家庭生活の非難〕

翌日は五月九日の月曜日、ジョイスト黒分二日目。朝方、校長は僧院<sup>マト</sup>の庭の樹下に坐っている。彼は考えていた——「タクールは僧院<sup>マト</sup>の兄弟たちに女と金を捨てさせなすった。ああ、この人たちは全く神に夢中になっている！ この場所は、まさにヴァイクンタ(ヴィシュヌの天国)だ。僧院<sup>マト</sup>の兄弟たちは、まさにナーラーヤナご自身の顕現だ！ タクールが逝かれてから、まだいく日も日が経っていないし——だから、タクールのお気持ちがそのままそっくりここに息づいているんだ！

あの同じアヨーデイヤの都！

ただラーマだけがない！

ここの兄弟たちに、タクールは各々の家庭を捨てさせなすった。何人かは家庭に留<sup>とど</sup>まらせておかれるが、これは何故だろう？ 彼らについては、ほかに方法がないのだろうか？」

ナレンドラは二階の部屋から、校長が独りで庭の樹の下に坐っているのを見ていた。彼は降りてきて、笑顔でたずねた——「校長先生、どうしたんです！ 何をしているんですか？」何ほどか言葉を

交わした後で校長は言った。「でもほんとに、君はいい声ですねえ！ 何か一つ讃詞スタヴをきかせて下さいよ」

ナレンドラはアブラドボンニヨンの讃詞（シヴァ神に向かって罪のゆるしを乞う祈りの詞）を朗詠する。世間に住んで家庭を持っている者たちは、とかく神を忘れて——どれほど罪や誤りを犯すことか——子供時代に、青壮年時代に、そして、老いてからも！ かれらは真剣になつて神に仕えたり、考えたり、瞑想したりすることは、およそないのだ——

既にこの世の光を見る前から

行為の結果に執着したために

重ねた数多の世の罪の報いとして

母の胎内で私は罰せられました

汚物の中で煮られる胎児の苦しみを

何にたとえたらよいのでしょうか

おお、シヴァ、シヴァ、シヴァ、大いなる神よ

理法のりに反そむきしわが罪をお許し下さい！

子供時代も苦しみは際限なく

垢あかにまみれた体でただ乳を泣きもと乞め

手足も思うままに動かせず

蚊やハエにうるさくつきまとわれ

日も夜も様々の病にとりつかれて

痛さ苦しさに泣き叫びました

おお、シヴァ、シヴァ、シヴァ、大いなる神よ

哀れな罪深き私をお許し下さい！

青壯おとなの時代は色声香味触の毒蛇が

体の重要な器官に噛みついて

私の識別力を殺してしまいました

そして富と息子と若い妻の楽しみに浸り

そのために、ああ！ 神を思うこともできず

空しい誇りにみちて尊大にかまえていました

おお、シヴァ、シヴァ、シヴァ、大いなる神よ

浅はかな罪深い私をお許し下さい！

年老いた今、感覚は正しい判断と行動の力を失い  
体に全く生命力がなくなったわけではないが  
数々の苦悩と罪と病と死別の悲しみに

気も心も萎え衰えてしまった……

それでもなお、心は神を思わず

つまらぬ欲や妄想に追い回されている

おお、シヴァ、シヴァ、シヴァ、大いなる神よ

愚かな罪深き私をお許し下さい

おお、主シャンカラ！

全身に灰をまぶしたあなたの身体は白く

笑みからこぼれる白き歯の輝き

手に持つは白いドクロの輪飾りと白い棍棒

あなたの乗る牡牛お牛は白

あなたの耳で揺れる白いイヤリング

もつれた髪の毛はガンガアの飛沫しぶきで白く光り

額に映る月の白き輝き

シャンカラ——『恩恵を与える者』の意でシ  
ヴァ神のこと

すべて白く、すべて清く、罪を許し、福を与える御方

祈詞スツクは終わった。再び話になった。

ナレンドラ「世間において、無執着の生活をするとか何とか皆さんはおっしゃるけれど、女と金カネを捨てなければどうにもなりませんよ。女といっしょに住んで、嫌な気持ちはしないのですか？ ウジ虫、痰たん、脂肪あぶら、嫌な臭いがいっぱいの方に――。

汚物にみち、ウジ虫が住み、悪臭発する肉体

肉と血と骨と髓とで成れる肉体

愚者はその肉体の接触を楽しみ、賢者はそれを避ける

ヴェーダーンタの言葉に喜びを感じないで神カムの甘露水を飲まない、そういう人生なんて空しいものです。

この歌、聞いて下さい――

人よ、迷いを捨てよ――

主を知って苦しみより逃れよ

四日ばかりの楽しみのために

命の友を忘れ果てるとは

人よ、愚かの極みと知れ！

「腰布カウペーンをつけるよりほかに道はありません。世間をおっぱり投げることですよ！」

こう言つてナレンドラは、カウペーンパンチャカム五連詩（出家の歌）を節をつけて朗詠した。

常にヴェーダーンタの哲理こしほを楽しみ

托鉢の食に満ち足りて

悩みなき心で行いゆく

出家サンニヤシこそ真まに幸なり

.....

一八八六年四月二十二日に全訳あり

それから又、ナレンドラは言った——「人間はなぜ、俗世ソサールに巻き込まれなければならないのですか？ 人間の性質は何でしょう？ 至福の智慧、なぜ、マールヤーに捕らわれなければならないのですか？

シヴァそのもの。自分こそ、あのサッチダーナンダ梵の本質（梵の本質）なんですよ！」

そしてまた美しい節回しで、シヤンカラアーチャリヤ大師スタヴの讚詞（ニルヴァーナシヤトカム六連詩）を朗詠した。

オーム、われ心ココロに非ず、知覚チカクに非ず  
個我アノミ、精神セイトに非ず

また、眼、耳、鼻、舌に非ず

地、水、火、風、空に非ず

われは歓喜カンキそのものなる至上意識チウジヤウイシキ

われはシヴァ(絶対者)なり、われはシヴァなり

一八八六年四月二十二日に全訳あり

ナレンドラはもう一つの讃詞サンギ、クリシュナの栄光をうたった詞を朗詠した。

オームの智識チシキによって怒り消え、心なごむ

でも私はまだ欲ヨメシに盲メシいてさまよい歩く

願わくはお護り下さい、救って下さい マドゥスターダナ

マドゥスターダナ——『マドゥウ鬼を滅した者』  
の意でクリシュナのこと

罪の沼にはまり込みし我を

請い願わくはお救い下さい、おお、マドゥスターダナ

妻子と家の幻影の網にしばられ

熱病のような渴欲に苦しむ

私をお救い下さい マドゥスーダナ

信仰うすく、力も無く

私はさまざまの不幸に悩んでいます

主よ、どうぞお助け下さい マドゥスーダナ

苦しくて長い人生 また繰り返す輪廻の世界

往ったり来たりで私は疲れ果てました

どうぞお助け下さい マドゥスーダナ

路には休む場所とて見あたら<sup>みち</sup>ず

まして、女の子宮の中にいるのは耐えがたい苦痛です

主よ、私をお救い下さい マドゥスーダナ

私の神よ ナーラーヤナよ この世から

この生死の輪から私を開放して下さい

どうぞお願いします 大いなるマドゥスーダナ



隠れ家を求めて ついに私はあなたの所に来た  
私には老いも死も恐ろしいのです

私を救って下さい 偉大なマドゥスーダナ

善い行いはせずに悪いことばかりして

いま俗界の罪の沼で喘いでいる

私をお助け下さい 大いなるマドゥスーダナ

数えきれぬ生涯をくりかえして

他人を見下してきた浅はかな私を

どうぞ許して助けて下さい マドゥスーダナ

口で言うことを実行したこともない

私は全く邪よこしまな人間です

またいつかどこかに女か男として

いく度たびも生まれなければならぬのなら

あなたへの信仰がますます深くなりますように

どうぞお護り下さい わが神マドゥスーダナよ

校長——（内心で）ナレンドラの離欲はほんとに強烈だ！ だから、僧院マトの兄弟たちも感化されて今のような状態になっているのだ。そんな様子を見て、タクルの信者の中でまだ世間の生活をしている人たちでさえも、女と金カネを捨てようと鼓舞されるのだ。ああ、彼らの状態ときたら！ あの御方はどういう理由で、まだ彼らを俗世サンヤムにおいておかれるのだろうか？ どのような道を進ませるおつもりなのだろうか？ いずれ、強い離欲の精神を与え給うのだろうか、それとも、このまま俗世に放っておくおつもりなのだろうか？

今日、ナレンドラとほか二、三の兄弟は、食事のあとカルカッタに出かけた。ナレンドラは夜には帰ってくるだろう。彼の家の訴訟問題はまだ片付いていないのだ。僧院マトの兄弟たちはナレンドラの不在には耐えられない。誰もが、ナレンドラは何時帰るのだろうか、心の中で思っていた。

食事のあと、僧院マトの兄弟たちは少し休息している。年長のゴパールは歌の本から歌詞を書き写している。シャラト、バブラーム、カーリーはプリーに行っている。ニランジャンは母親に会いに家に帰っている。

午後、ラビンドラが気狂いみたいな様子でやって来た。裸足で、黒い縁ふちどりの腰布カゴルを半分だけ身につけている。狂人のような目がぐるぐるまわっている。皆が、「いったいどうしたんだ？」と聞くと、ラビンドラは答えた。「すぐ、みんなお話しします。——私はもう家には戻りません。あなたたちといっ

しよに此処に住みます。あの裏切り者め！聞いて下さい。五年間も習慣みたいに飲んでいた酒を彼女のために止めたのに！もう八ヶ月も、一滴だって飲んでいないんだ！それなのに、あの裏切り者め！」僧院マドの兄弟たちは口をそろえて言った——「まあ、気を落ち着けて。どうやって此処へ来たの？」

ラビンドラ「カルカッタからずっとハタシで歩いてきたんです」

信者たちはきく——「腰布カボのもう半分はどこへやってしまったんだい？」

ラビンドラ「出てくるとき彼女が引つ張ったので、半分ちぎれてしまったんです」

信者たち「ガンガーへ行つて沐浴して、頭を冷やしておいで。それからいろいろ話を聞こう」

ラビンドラはカルカッタで大そう尊敬されているカーヤスタ階級家世の家に生まれた。年令は二十

二才だ。タクール、聖ラーマクリシュナドゥラネーシヨルに南神村のカーリー寺でお目にかかつて以来、タク

ルの特別の愛顧をうけていた。一度、三晩つづけてタクールのところに泊まったこともある。性格は大そうおだやかで優しく、タクールも大そう彼にやさしくしておられた。しかし、タクールはこう言っておられた——「お前はチト遅れるよ。まだ少し、ポーガこの世における苦楽の経験が残っているからね。今はどうにもできない。盗賊が家を襲つたその時には、ポリスは何もできない。いくらか略奪がすんだころを見計らつて逮捕にとりかかる」このときラビンドラは、売春婦に夢中になっていた。しかし、ラビンドラはいろいろな長所をもっている——貧しい人に施しをしたり、神を瞑想すると言つたような……。夢中になっていた売春婦が不誠実であったことに今やっと気付いて、かくも取り乱し

た有様で僧院マトに駆けこんで来たのである。もう二度と世間には戻らないと決心して――。

ラビンドラはガンガー沐浴マトに行った。パラマーニクマトのガートマトに行ったのだらう。一人の信者マト（多分校長自身のこと）がいつしよに行った。この信者の大いなる願いは、ラビンドラが僧院マトの修道者たちと交わることによって、靈意識がますます発達していくことだった。沐浴をすませると、彼はラビンドラをガートの近くの火葬場に連れて行った。そして、そこにある死骸を見せた。――「此処マトに僧院マトの兄弟たちは夜時々独りでやってきて、瞑想しているのですよ。ここで私たちが瞑想するのはよいことです。世間のことはまことにはかない一時的なものだということが、よくわかりますからね」と言っただけさせた。ラビンドラはその話を聞いて、自分も瞑想するべく坐った。しかし、長くはつづかなかつた。心がさつぱり落ち着かないのである。

二人は僧院マトに戻ってきた。タクルの部屋に入つて、二人はタクルにごあいさつした。信者はまた言っただけさせる――「この部屋で僧院マトの兄弟たちは瞑想するのですよ」とするとラビンドラは、また瞑想するべく坐りなおす。しかし、ほんの僅かの時間しかつづかなかつた。（訳註、タクルの部屋――タクルの遺骨が安置されている部屋）

校長「どうしました？　気が落ち着かないの？　だからやめたんですね？　うまく瞑想できないんですしやう？」

（訳註）カーヤスター―クシャトリアー王族、武士階級の中の一階級カースト。ナレンドラも同じ階級の出。

ラビンドラ「二度と世間に戻らないことは、もう固く決心したんです！でも、どうしても心が鎮まらない——」

校長とラビンドラは、僧院マトの人氣じつけのない場所に立っている。校長はブツダの話をしていた。天女たちの歌をきいて、ブツダは最初に靈意識に目覚めたのだ。最近僧院マトでは、ブツダの行伝とチャイタニヤの伝記を規則的に読んでいる。校長は、その天女の歌をうたつてきかせた——

何処どこから来て何処どこへ漂さまよいゆくか

疲れても休とむ処ところとてなく

往いきて戻りて、泣なき、笑わい

何故なぜつづくのか この空ひらしい遊あそび

夜、ナレンドラ、ターラク、およびハリシユがカルカッタから帰ってきた。そして——「ウー、し、こた、ま御馳走ごちそうになってきたよ！」と言った。彼らは、カルカッタの或る信者の家でもてなしを受けたのである。

ナレンドラと僧院マトの兄弟たち、それから校長とラビンドラは、ダーナー部屋マに坐まっている。僧院マトに帰つてきたナレンドラはすべてを聞いた。

〔世間の炎で焼かれる個霊レイヴァとナレンドラの教訓〕

ナレンドラは歌った——歌によせて、ラビンドラに教訓を与えるつもりなのだ。

人よ、迷いを捨てよ

主を知って苦しみより逃れよ

.....

ナレンドラはまた歌った——ラビンドラに教訓を与えるような歌を

ハリの甘露ウマの美酒飲んで

さあさ、酔おうよ、ホ、ホ、ホウ！

子供の時代ときには遊びぼうに呆け

青壮年おとなの時代ときは女に敷かれ

老いてはボンヤリ気力もなくて

火葬場やきば行きの車を待っている

へその真ん中に香袋ふくろがあるのを

どうしてジャコウ鹿に知らせたらいいか

正しい師匠ツルに道も訊きかずに

盲めくらのまままでこの世の森を

人は鹿のようにさまよい歩く

しばらくして、僧院マトの兄弟たちは苦行者タバツンカーリーの部屋に坐っていた。ギリシユ・ゴーシユの新著書、  
「ブツダ行伝グ」と「チャイタニヤ行伝グ」の二冊が僧院マトに届いていた。ナレンドラ、シャシー、ラカール、  
ブラサンナ、校長たちが坐っている。この新しい僧院マトに来て以来、シャシーはただひたすらタクルの  
供養奉仕にはげんでいる。その熱心さには皆は驚嘆していた。タクルのご病氣中も、彼は昼夜の  
別なく看病に献身していたものだが、今もその時と全く変わらぬ態度で奉仕しているのである。

兄弟の一人が、「ブツダ行伝グ」と「チャイタニヤ行伝グ」を読んでいる。彼は節をつけて、ちよつと  
ふざけた調子で「チャイタニヤ行伝グ」を読んでいた。ナレンドラは彼の手から本をひったくり、「そ  
んなことをして、せつかくの良いものをダメにする気か?」と言った。

ナレンドラは自分で、聖チャイタニヤが階級の別なくあらゆる人々に愛を与えたところを読んだ。

兄弟「私は思うんだけど——他人に愛を与えるなんてことはできないよ」

ナレンドラ「大覚者先生バランヒンサマハシヤイはほくに愛を与えて下さった」

兄弟「ほう、そう確信しているんですか?」

ナレンドラ「君に何がわかる？ 君は、サーヴァント（神の僕）クラスだ。みんなぼくに任せ、僕の足をマツサージすることになるだろう——シャラトやミトラ、デソーさえも（皆笑う）。何もかもわかったなどとユメユメ思いつてはならんぞ（皆笑う）。さ、タバコを用意したまえ」（皆大笑い）

兄弟「よいい——し・ないよ……」（一同大笑）

校長は内心で独白——タクール、聖ラーマクリシュナは僧院の兄弟たち全部に力をお授けになったのだ。ナレンドラだけではない。その力がなかったら、どうして女と金が捨てられようか。